



三方よし

藤枝市立藤枝中央小学校

この作文は、【第41回（平成28年度）「小さな親切」作文コンクール入選作品（※原文のまま）】です。

「しんせつってむずかしい」

小学2年生 男子

夏休みがはじまってすぐのことです。ぼくはおとうとと、きんじょのこうえんに虫とりに行きました。せみとりをしていると、知らない男の子がぼくに、

「あみかして。」

とってきました。ぼくはかしてあげないのはいじわるだと思って、かしてあげました。しばらくおとうととあそんでいて、あみをかえてもらってまた虫とりをしようと思ひ、その子をさがすと、もういませんでした。とてもかなしい気持ちになりました。かしてあげることがしんせつだと思ったのに。

おれたあみを持って、かなしくてかなしくてなきながらいえにかえりました。おかあさんにおこられるんじゃないかとしんぱいで、どうしていいかわからずに、だまっていたら、おとうとがペラペラとおかあさんに、こうえんでのことはなしてしまいました。

おかあさんはいつも、「知らない子とあそんでトラブルになるとこまるから、なるべくあそばないように」といいます。ぼくは、ああ、こういうことなんだなと思いました。

「どこのだれかしらないの？ごめんねはしてくれたの？」

おかあさんは、

「だからいったでしょ。」

とぼくをしかったです。

ぼくは、あみをかしてあげることがしんせつだと思ったのに、なんであみまでおられて、おまけにおこられなきゃいけないんだと、くやしくなりました。

本とうのしんせつがなにか、ぼくはしりたいです。



ぼくが思うしんせつは、ケガをした人をたすけたり、電車でせきをゆずってあげたりすることだと思います。でも前に、ばあばに「すわっていいよ」とゆずったら、「ばあばは、そんな年よりじゃないよ」といわれてしまいました。

しんせつと思ってしたことが、じぶんがかなしい思いをしたり、あいてがいやなきもちになることは、本とうのしんせつではないのだと、おかあさんがおしえてくれました。

しんせつをしてあげたらぼくも、してあげたあいても、あったかい気持ちになるのがしんせつなんだって。しんせつってむずかしいなと思いました。

あみのことをいわないでといったのに、おかあさんにつげ口したおとうとも、本とうはぼくのことをおもってくれたのかも。あの子も、もしこんど会ったら、きちんとごめんしてくれたらいいのにな。そしたら、ぼくのあの日のいやなできごとが「しんせつ」になるのにな。

当時、小学校2年生だった男の子の体験を元に書かれたこの作文は、親切の難しさについて素直に表現されています。【ぼくは、あみをかしてあげることがしんせつだと思ったのに、なんであみまでおられて、おまけにおこられなきゃいけないんだと、くやしくなりました。】・・・こんな思いをするくらいなら、親切なんかするもんかと思ってしまう子もいるかもしれませんよね。男の子のように、「(ます)自分よし」の子が増えたとしても、「相手よし」にならない世の中は、悲しすぎます。

【しんせつをしてあげたらぼくも、してあげたあいても、あったかい気持ちになるのがしんせつなんだって。】【あの子も、もしこんど会ったら、きちんとごめんしてくれたらいいのにな。そしたら、ぼくあの日のいやなできごとが「しんせつ」になるのにな。】・・・お母さんの言うこともよくわかります。でも、「あなたのしたことでも立派な親切だと思うよ。」と、会って伝えたいと思ったのは、私だけでしょうか？

(文責 校長 新村和彦 ※イラストは校長添付)